**現代日本における大学の教育理念に対する自己認識**

―大学総長の入学式式辞による試論―

総合政策学部総合政策学科四年

春藤光太郎

71304344（s13434ks）

**概要**

　本研究は大学総長の入学式式辞を分析することで現代の大学教育理念の全体像を概観するものである。入学式式辞は新入生に対して大学の代表である総長が自身の大学において何を学んでほしいかを述べるため、そこに大学教育の理念を見出すことができると考えたからである。そのためまずは現代の大学を横断的に見るために天野郁夫の類型化を元に式辞を分析し、共通点及び相違点を抽出した。次に大学教育理念と式辞の時代変遷を理解するために慶應義塾大学に焦点を絞り計量テキスト分析を行い先行研究の東京大学との比較を行った。こうした横断・縦断的な分析により、式辞が政府・世論・財界等の社会情勢に大きく影響を受けていること、そしてその結果として現在の大学教育理念は同質化していると結論づけた。

**【キーワード】**高等教育・大学教育・入学式式辞・類型化・計量テキスト分析

[**第１章** はじめに 2](#_Toc472957583)

[**第１節** 問題関心 2](#_Toc472957584)

[**第２節** 研究対象 2](#_Toc472957585)

[**第３節** 先行研究と研究手法 2](#_Toc472957586)

[**第２章** 現代における大学の自己認識 4](#_Toc472957587)

[**第１節** 旧帝国大学の自己認識 5](#_Toc472957588)

[**第２節** マンモス私立大学の自己認識 7](#_Toc472957589)

[**第３節** 小規模大学・地方大学の自己認識 8](#_Toc472957590)

[**第３章** 慶應義塾大学の時代的変遷 10](#_Toc472957591)

[**第１節** 式辞内容の概観 11](#_Toc472957592)

[**第２節** 時代による推移と変容 12](#_Toc472957593)

[**第３節** 「慶應義塾大学」の自己認識 13](#_Toc472957594)

[**第４節** 「東京大学」と「慶應義塾大学」の比較 15](#_Toc472957595)

[**第４章** おわりに 16](#_Toc472957596)

[**第１節** 結論 16](#_Toc472957597)

[**第２節** 課題 17](#_Toc472957598)

# はじめに

## 問題関心

筆者の研究目的は現代日本において大学で行われている教育がどういった目的を持っているのかを明らかにすることにある。筆者は慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス（SFC）という大学教育改革の先駆的な事例として名高い大学学部に入学し、人文学から情報工学に渡る様々な知見に触れ、こうした新しい試みを行うSFCの評価を是非共に耳にしてきた。入学当初はSFCが唱うセンセーショナルな文句に心躍った。しかし入学と同時に所属した硬派な学術系サークルにおいて人文科学に触れる中で、伝統的な大学論に魅力を感じるようになった。こうした背景から、学生として自身が従事している学問と大学教育を客観的にみたいと考え、大学教育の理念及び目的について研究したいと考えるようになった。しかし大学教育論は現在統一理論として研究が進んでいるかというとそうとは言い難い。事実、現在言説として流布しているものは現在の大学教育とは乖離した伝統的な大学論、つまりBildungやLiberal Education、General　Educationであったり、教育現場における体験を元にした持論が主であった。そのため現在の大学が大学教育に対してどういった認識を有しているのかを大学全体の潮流として認識したいと考え本研究を行うに至った。

よって本研究の関心は現代の大学の自己認識についてである。現在の大学の多くが有している自己認識の特徴、及び相違点を明らかにし、その根本的な思想に迫っていきたいと考える。

## 研究対象

　研究対象は「大学総長の入学式式辞」とした。入学式は大学総長が新入生に対して大学でどういったことを学び取ってほしいかを代表して挨拶する機会であり、各大学の成り立ちや存在意義、特徴について触れられているからである。また、ほぼ全ての大学で行われており、一般に公開されていることが多い点、過去に遡って比較ができる点から、より分析による知見が得やすい点も考慮し、選択することとした。また、使用する式辞は現在日本の大学の殆どが行っている４月入学のもののみとし、より共通した特徴をもつ学生が対象となる内容で統一した。加えて、多くの大学ではアドミッションポリシーを公開していることから、式辞では明確にされてない大学の伝えたい意図を明らかにできるよう、一部引用することとした。

## 先行研究と研究手法

　本研究では、第二章において2,015年の様々な大学式辞の比較を行い、第三章にて慶應義塾大学の通年の比較を行った。

　大学の式辞における内容分析については、酒井（1965）によるジャーナリスティックなものや船寄（2010）による大学院卒業式の学長式辞分析などがある。しかし大学入学式式辞に関する学術的な分析は廣内他（2015）による宇都宮大学のものと橋本(2015)による東京大学のものに限られる。加えて廣内他の研究は学会発表によるもので一般公開されておらず、確認することができなかった。また、橋本（2015）は特定の大学を時代変遷を追って分析するもので、大学の全体像を明らかにするものではない。そのため後述する第三章の分析において参照していきたい。

特定の時代における大学教育の全体像を明らかにする研究としては、類型化があげられる。類型化とはある一定の基準に基づき大学をいくつかのカテゴリーに分ける理論的作業である。類型モデルの構築の先駆はアメリカである。1967年にR.G.コーウィンが教育機関の組織分析のために組織の類型化を推し進める必要性を主張。そして1973年にはカーネギー高等教育審議会が「高等教育の分類（A Classification of Higher Education）」と題されたレポートを発表し大学を5タイプ10種類に類型化した。この枠組みはその後の研究のひな型となっている。またR.バーンバウムのモデルでは、管理形態・規模・学生性別構成・教育のプログラムの種類・授与学位レベル・マイノリティが占める割合の6つの変数を用いて141種類に分類していた。

　こうしたアメリカの類型化作業を参考に、日本でも複数の研究者が日本の大学を類型化する試みを行ってきた。その代表的な研究者が天野郁夫である。天野は「我が国の高等教育システムは、それを構成する多数の大学を、いくつかの類型にカテゴリー化し、比較検討することなしには明らかにしえないような構造を持っている」（1986）と指摘し、長年に渡って大学の類型化を行ってきた。そして日本の大学に関する類型モデルの中でも最も汎用性の高いものと評価され日本の大学の類型化研究のひな型となった。

　天野の類型モデルは変遷順に3段階に分かれている。まず一つ目のモデルが、創設年・機関形態・地域性の3つの指標によって、中央大学・全国大学・地方大学という3種類の型を設定したものである。このモデルは国立大学を制度的構造に焦点を当てて分析したものであった。その後新たに在籍者数からなる大学の規模を指標に加え、国立総合大学・国立地方大学・マンモス私立大学・小規模私立大学の4種類の類型を構成した。そして最後により踏み込んだ類型化を行うために研究機能を分類の基準にし、モデルを構築した。天野は研究機能を大学院の有無と学部構成の二つの要素に分け、一つ目の指標である大学院に関しては修士課程と博士課程の別と、学部学生に対する大学院生の比率の二つに分けた。また二つ目の指標である学部構成では学部を人文・社会・自然・医歯の四系統にわけ各大学を系統の組み合わせにより総合・複合・単系の三種に分類した。この分類により天野は類型を研究大学・大学院大学・準大学院大学・修士大学・学部大学の5類型と総合・複合・単系の3類型の組み合わせからなる15種に分類し完成させた。

　既存モデルである天野モデルは大学の現状を考えると二つの課題があると村瀬（2009）は述べている。一つ目の課題が大学数の増加である。天野モデルの構築時は大学の総数が443校であったが、現在は779校と大幅に増加している。そのほとんどが私立大学の増加であり、天野モデルの時代よりも私立大学の存在感が高まっている。そして二つ目の課題が、類型分類の基準が適切で無くなっているということである。天野モデルの到達点である研究機能の指標は、大学における研究機能の重視であり、モデル構築時の高等教育がトロウの理論 でいうところのエリート段階に該当していたことが強く影響している。しかし現在の高等教育はユニバーサル段階に移行しており、旧来の研究を重視した指標は適切で無くなってきている。加えて、本研究では教育を焦点としていることから、天野（１９８４）の類型化は導入することが難しい。また、吉田（２００１、２００２）は天野の研究を踏まえて国立大学を歴史的経緯と学部構成から「形式的」に分類したが、大学教育の理念のような形式的な基準には表れにくい項目は考慮されなかった。そのため本研究では大学教育理念の全体像を明らかにする研究の一試みとして過去の研究の経緯を踏まえて行っていきたいと考える。

第三章では、第二章において現在の大学の大学教育の自己認識を概観した上で、こうした自己認識がどういった時代変遷を辿って醸成されたのかについて、大学を絞り比較検討することで考察して行くこととする。そのため橋本（2015）を元に同様の研究手法である計量テキスト分析を行い比較検討を行うこととした。

# 現代における大学の自己認識

　本章の主眼は同一の時期に行われた式辞が各大学においてどういった共通点及び相違点を持っているのかについて明らかにすることである。先行研究に則って大学を形式的に区分し、その中で共通点、相違点を抽出し明らかにしていきたい。

第一節では、旧帝国大学に焦点を当てることとする。国立大学は天野（１９６８）によると私立大学と比べて「一府県一大学」原則[[1]](#footnote-1)に基づいて高等教育機会の地域的均等化の役割を果たしてきたことから、地域における高等教育機会の担保を目的として同様の教育目標を有しているであろう国立大学を分析することには意義がある。しかし、国立大学であっても総合大学と単科大学や、旧帝国大学・旧官立大学・新制大学などと複数に分類することができ、それぞれ教育政策における役割が異なっている。例えば「一府県一国立大学」の原則は当初から北海道、東京、愛知、京都、大阪、福岡を例外としており、この地域が旧帝国大学の所在地であることから他大学と異なる役割を期待されていたといえる。そのためまず特別な役割を担っていたであろう旧帝国大学に分類できる大学、つまり北海道大学、東北大学、東京大学、名古屋大学、京都大学、大阪大学、九州大学の７大学に絞って共通点を見出し類型化の足掛かりとしたい。

第二節では私立大学に焦点を当てていきたい。対象としたのは慶應義塾大学、早稲田大学、上智大学、明治大学、立教大学、中央大学、青山学院大学、法政大学である。私立大学は日本の教育政策上、国公立大学では対応できない地域や学生数を確保するための要として量的発展がなされてきた経緯がある。文部科学省は「高等教育の量的拡大を私立大学に依存してきた[[2]](#footnote-2)」と述べており、現在も文部科学省のスーパーグローバル大学創成支援に多くの私立大学が選ばれるなど日本の高等教育の一翼を担っている。そのため本節は私立大学として伝統を有しておりかつ現在でも高等教育の一翼を担いうるマンモス私立大学を選び、その式辞を取り上げて共通点及び相違点を明らかにし、同じく歴史のある旧帝国大学と比較したい。

　第三章ではその他の様々な大学に焦点を当てていきたい。私立大学政策として量的発展が目指され、重ねて地方分散化政策が推し進められてきた。しかし1990年代後半には大学の入学定員が受験人口を上回り、地方の大学への受験人口の減少が起こるなど、私立大学・地方大学にとって学生募集は大きな課題となった。そうした中で各大学が様々な対策を行う必要性が出てきたことから、第二節でみた私立大学以外の様々な大学も取り上げていくことで、より大学の全体像を把握できる分析を行っていきたいと考える

## 旧帝国大学の自己認識

　旧帝国大学に分類される７大学は一府県一大学の原則から外れている。そのため地域の教育機会の均等化とはことなる役割が与えられている。そのためそれら７大学は総長の式辞において人類社会の発展という共通の目的を提示している。九州大学の「日本及び世界の発展に貢献することを目的とする」[[3]](#footnote-3)や大阪大学の「人類社会の発展に貢献する」[[4]](#footnote-4)、そして名古屋大学の「人類や社会に貢献する事が、最終的なゴールです」[[5]](#footnote-5)のように、地域外、国外を視野にいれた目標を提示している。この目的は７大学すべてにみられる特徴である。

　７大学の目的が「人類社会の発展」であったことから、そうした発展に資する人材を輩出する教育機関としてすべての大学が国際社会で役に立つ人材を挙げており、そのために学識やリーダーシップ、多様性を持った専門職業人を輩出することを目標としている。たとえば、東北大学では「人類社会の未来を担う高い倫理性を備えた国際的リーダーを育成する」よう務めると述べ、学部志望者に求める学生像の条件に「豊かな学識とリーダーシップを備える高度な職業人として社会の発展に優れた貢献をしようとする志」[[6]](#footnote-6)を挙げる。また東京大学も「知識を武器として活動し、既存の常識を超える新たな発明や発見をし、そのことを通じて世界を舞台に、人類社会に貢献するような人物」[[7]](#footnote-7)を知のプロフェッショナルと呼び学生に求めている。これらは輩出した人材が専門職業人であること、そして活躍する場が国際社会あること、その上で各自がリーダーシップを発揮することの３つの観点が共通項目として含まれているといえる。

前身が旧帝国大学である7大学は輩出人材の理想像を国際社会で役に立つ学識やリーダーシップ、多様性を持った専門職業人として掲げているが、その人物像に求められる能力として大まかに３つの要素が必要であると述べている。それは実務的能力、コミュニケーション、価値基準と呼べるだろうものである。

実務的能力とは実際に専門職業人として世界で働いた際に求められる能力である。この能力は様々な言葉で語られており、たとえば北海道大学では「世界の課題解決に貢献する北海道大学」を標榜しており現代社会の問題が複雑化していることから「その解決には科学技術や社会科学の最先端の知識が求められる」[[8]](#footnote-8)と述べている。また東京大学では「高度な専門知識を基盤に、問題を発見し、解決する意欲と能力を備え、（中略）自ら考え、行動できる人材の育成」[[9]](#footnote-9)を社会から負託された自らの使命の達成にために必要であるとし、そのために「それぞれの専門領域で最先端の知識を身につけなくてはなりません」[[10]](#footnote-10)と専門性を強調している。また九州大学も九州大学教育憲章にて第六条を専門性の原則とし「秀でた専門性を有する人材を育成」と述べており、専門家の育成を大きな柱として据えていることがわかる。このようにすべての大学で専門性を身につける必要性を述べている。そのうえで、各大学の教養教育課程の後に行われる各学部教育によってこの能力が培われることを入学式の式辞の冒頭で述べている。

７大学とも輩出する人材が国際社会で活躍することを前提としているため、海外においてもコミュニケーションがとれることを一つの柱として強調している。そしてそのために必要なものとして語学力だけでなく多様性への理解が必要であると強調する。語学力においては、名古屋大学が「コミュニケーションの共通の道具としての英語力は特に重要であり、名古屋大学では英語でのコミュニケーション能力を重視して、様々な英語力強化のプログラムを実施しています。」[[11]](#footnote-11)と祝辞の時間を割いて言及しているほどで、他大学においても語学力が当然求められることは入学式式辞にて言及されていることからうかがえる。そのうえで、語学力以外に国際社会でコミュニケーションを行う際に求められるものとして多くの大学が多様性への理解を挙げている。例えば、東京大学では「多様性すなわちダイバーシティ（diversity）の尊重」と「自己を相対化する視野」[[12]](#footnote-12)の二点が国際社会の複雑な問題を解決する際に必須であるといい、その理由を「多様な観点から様々な知恵を出し合うことが不可欠だから」でありそのために「自らと異なるものを理解し、互いの違いを尊重しあいながら協力すること」が求められると述べる。このように語学力と多様性への理解はすべての大学が念頭に置いており、国際社会で活躍するための前提条件としている。

国際社会で活躍する人材の要素として７大学に共通していたものは実務的能力とコミュニケーション能力であったが、そうした能力とは異なる要素として、人材の精神面においても共通した見解が見られた。東北大学では「得られた知識をもとに的確に判断を下す能力と、その判断を下す基準となる、個々人の価値基準、つまり人生において何に価値を見出していくかの世界観や人生観を確立することが、大学で学ぶ最も大切なことになる」[[13]](#footnote-13)と大学教育の意義を実務的能力やコミュニケーション能力ではなくこうした人間性に求め、国際社会で活躍する人材にとって最も必要なことだと述べている。また、東京大学においては、アドミッション・ポリシーにおいて「市民としての公共的な責任」や「強靭な開拓者精神」といった文言を載せ、東京大学に入学する学生に期待されるものとして「健全な倫理観と主体性と行動力」を挙げるように人間性に重点を置いていることが伺える。また東京大学の前期課程で行われる教養教育では「広範で深い教養とさらに豊かな人間性」が培うことができるとしている。この人間性という文言は名古屋大学のアドミッション・ポリシーにも記載されており、「名古屋大学は、未来を切り拓く「主体的な創造心」、「立ち向かう探求心」、こうした心を醸成する「豊かな人間性」を育む」として教育の基本方針としている。さらに北海道大学も「本学は、これら４つの理念[[14]](#footnote-14)のもと、教育研究を通して、皆さんを、我が国のみならず、これからの世界を勇気を持って先導していくような、国際性豊かで、人格に優れ、LoftyAmbition（高邁なる大志）を持った人材に育てることを目標としています」[[15]](#footnote-15)と述べており、人間性と同様の言葉である人格を大学で育てることを明言している。こうした人間性・人格・自己といった言葉は7大学すべてで言及されており、理想の人材には必要不可欠なものであり、なおかつ大学で磨くことができると述べられている。

本研究では旧帝国大学である北海道大学、東北大学、東京大学、名古屋大学、京都大学、大阪大学、九州大学の7大学を対象に、大学教育の理念の共通点を分析した。結果から言えば、各大学は日本における教育政策上の役割に基づいて、同様の問題意識と価値基準を持っていた。まず最初に大学の使命を人類社会の発展とし、そのために必要な人材として、国際社会で役に立つ学識やリーダーシップ、多様性を持った専門職業人を育成しなくてはならないとした。そのため、学生に求められる能力として①実務的能力（専門性）②コミュニケーション能力③人間性の三つが求められ、大学において培うことができるとした。

## マンモス私立大学の自己認識

　本節はマンモス私立大学として戦後一貫して多くの学生を有し日本の高等教育を担ってきた大学に焦点を当てたい。対象とした大学は、慶應義塾大学・早稲田大学・上智大学・明治大学・立教大学・中央大学・青山学院大学・法政大学の８校である。マンモス私立大学においても旧帝国大学と同様の共通点がみられた。

まず第一に、共生や多文化理解、語学力の必要性は旧帝国大学同様に私立大学であってもすべての大学で掲げられている。例えば立教大学では教育目的の中で「地球および地域社会の一市民として、（中略）異なる価値観を持った人たちと協働してプロジェクトを遂行できるようになる教育[[16]](#footnote-16)」を掲げており、明治大学でも入学式の学長告辞で「グローバル人材の育成」を標榜し語学力だけではなく「異なる場所からやってきた人々の価値観、文化、哲学、宗教を学び、互いに認め合う」ことができる人材こそが真のグローバル人材であると述べている。ここで取り扱った私立大学は多くがスーパーグローバル大学創成支援に採択されているため、そういった意味でも多文化理解やコミュニケーション能力に重点を置かれている点で旧帝国大学と同様である。

第二に、自律性が共通点として挙げられる。こちらも旧帝国大学同様に主体的・自立的人材や、リーダーシップを発揮する人材を輩出することを強く標榜している。例えば青山学院大学では学長挨拶で「優れた専門性を持ち、日本及び国際社会の中での自己の役割を自覚し、人に優しいリーダーとして活躍してくれるはず」と述べ、早稲田大学も「地球市民一人ひとりの幸せの実現をリードする能力と意志を持つ人材[[17]](#footnote-17)」を育成すると述べている。法政大学も「自由な発想で考え、新しい問題に積極的にチャレンジする自立型人材を育成すること」を教育目標とし、総長の式辞でも自立した市民を育成することについて触れていた。このように私が調査してきた私立大学は多くの点で旧帝国大学と共通する点があった。

その反面、専門性にあてはまる実務的能力の向上はあまり重要視されていない。主に異文化理解やリーダーシップ、問題発見解決のような取り組む姿勢や向き合い方に重きを置いており、専門性を活かして職業人として社会に貢献することは旧帝国大学ほど明確に述べられていなかった。

平成10年度の大学審議会答申「２１世紀の大学像と今後の改革方策について―競争的環境のなかで個性が輝く大学」では、「教育研究についての理念・目標を明確にし大学の多様化・個性化を進める」とあり、「各大学がそれぞれの建学の精神にのっとった自主的な運営」を行うことが期待されていた。当然、旧帝国大学よりも建学の精神にのっとった教育目的の提示がされてはいた。しかし、大きな違いは専門性の強調がないことであり、その一方で現在のグローバル化を背景に共生などの異文化理解は多くの大学で共通して掲げられているなど大学の多様化が成しえているとは考えにくい結果となった。

## 小規模大学・地方大学の自己認識

　本節では先行研究では扱われることが少ない新設の大学や小規模の大学に焦点を当てていきたい。こうした大学であっても前述に見られたグローバル化の影響、リーダーシップや問題発見解決のような自律性は同様に強く見ることができた。これは地域に根ざすことを述べている地方大学であっても同様であった。個々にみていきたい。

　まず異文化理解と国際交流について。亜細亜大学では「アジアの未来に飛躍する創造的人材[[18]](#footnote-18)」を標榜し「留学派遣数では、早稲田大学などに次いで、日本で３番目に多い大学[[19]](#footnote-19)」と実績を挙げることで、自身の大学を「国際交流の場」であると述べている。他にも桃山学院大学では標榜する「体験教育」の具体例としてインドネシア国際ワークショップやインド異文化・ボランティア体験セミナーに参加した学生の事例を取り上げ、式辞の大部分の時間をその国際交流の事例に費やし、体験教育の肝を式辞において「何かに気づき、感じそして行動し、自他を理解して自分自身の変容を促すことを目指すもの」と述べ、異文化理解と共生の考え方を新入生に向けて強く発信している。また、杏林大学では式辞において新入生・保護者へのお祝いの言葉の後に、「中国、韓国、ベトナム、台湾からの留学生の皆さん。杏林大学に入学されたことを全教職員あげて歓迎します。杏林大学での学生生活を通して日本の文化にふれ、多くの経験を積んでくださることを期待しています。」と述べ、新入生全体への挨拶の中に敢えて留学生への言葉を加えることで、大学の国際交流をアピールしている。加えて大学内に国際交流センターが設置されている点や、その理念として「本学の教育は“Moving global, Staying local”であり、地域からグローバルに活躍できる人材の育成を考えています。」と述べるなど地域と世界を股にかけた教育機関であることを重ねて強調している。

　杏林大学のようなローカルとグローバルを射程にした大学として久留米大学も挙げられる。久留米大学は「多様な教育を提供している」と述べた上で、その具体例として「以前から協定を締結していた久留米市に加え、地域連携センターの介入で筑後市と、また、理事長のご尽力で三井住友銀行との包括連携協定を結び、両市の地方創生事業に参画したり、学生のインターンシップの推進など就職が有利に展開できるような方策を実行しています。」と地域との連帯を述べる反面、日本私立大学連盟による大学生の生活実態調査を元に「留学経験がある学生は8.3%と少数派ですが、留学経験者は学生生活の充実度・満足感が高いという 結果が出ています。一方、留学は考えていない学生が全体の47.3%あり、その主な壁は経済面と語学力です。本学は現在12カ国24校と協定校関係を結んでおり、留学や語学研修については国際交流センターがサポートしています。」と留学の推奨かつその大学としての支援を強調している。こうした国際交流と異文化理解は地域や所属学生の知的水準に関係なく様々な大学でアピールポイントとして挙げており、大学の自己認識として提示する共通点と考えられる。

　次に学生の自律性に関してみていきたい。学生の自律性は前節までにリーダーシップや自分の頭で考える力などの標語で主張されてきたが、こうした主張は様々な大学で見て取れる。例えば札幌市立大学では大学での学びとして「主体的学び」を挙げ、大学で学問に触れることで「自分なりの思考スタイルがはっきりと見えてくる[[20]](#footnote-20)」と考える力を養っていくことを新入生に求めている。加えて、関東学院大学では大学の先にある「社会」を挙げ、「そこでは否応なしに、皆さんが、これから身に付けるべき力、本当の意味での実力で、自分の将来を切り開いていかなければなりません。」と自律し自立した人として新入生に卒業していって欲しいと学生生活の姿勢について謳っている。こうした大学での主体性は多くの場合、高等学校以下の課程と大学及びその先が姿勢として異なり、大学の使命がそこにある[[21]](#footnote-21)と述べられており、こうした点も日本の現代の大学の一般的な自己認識として挙げられる。

　このように多くの大学で同様の内容が式辞として述べられており、現代において大学の自己認識は皆親しいものであることがわかった。その最も共通している点が、グローバル化を背景とした異文化理解と共生の考え方、社会に出た際に主体的に行動し課題を解決していく姿勢と能力である。これらの能力は社会情勢に強く影響を受けている点で、大学の教育理念とその自己認識は社会と切り離して考えることができない。そのためどういった大学群であっても共通の言説がなされているのだと考察できる。

# 慶應義塾大学の時代的変遷

　前章において現在の大学の自己認識は共通している部分が多く、それらは社会情勢の反映が背景にあるとわかった。そうした知見を踏まえ、本章ではそうした社会情勢の影響が時代変遷においてもみられるのかどうかについて分析していきたい。総長式辞を用いて時代変遷を辿った研究として、橋本（2015）の東京大学の研究がある。この研究では東京大学の式辞が大学を取り巻く時代背景に影響を受けていたことを明らかにしている。そのため本研究では東京大学と同様に文部科学省の提唱するスーパーグローバル大学（トップ型）の中で、私立として選ばれている大学の一つである慶應義塾大学の塾長式辞を対象に分析を行った。

　戦後における慶應義塾大学の歴代塾長は高橋誠一郎（在任期間：1946年～1947年）、潮田江次（在任期間：1947年～1956年）、奥井復太郎（在任期間：1956年～1960年）、

高村象平（在任期間：1960年～1965年）、

永沢邦男（在任期間：1965年～1969年）、

佐藤朔（在任期間：1969年～1973年）、久野洋（在任期間：1973年～1977年）、石川忠雄（在任期間：1977年～1993年）、鳥居泰彦（在任期間：1994年～2001年）、安西祐一郎（在任期間：2001年～2009年）、清家篤（在任期間：2009年～）の11名である（敬称略）。この中でテキストが入手できたものは潮田江次（1952年～1954年）、加藤元一[[22]](#footnote-22)（1957年）、高村象平（1961年～1964年）、今泉孝太郎[[23]](#footnote-23)（1965年）、永沢邦男（1966年～1969年）、佐藤朔（1970年～1972年）、久野洋（1974年～1976年）、石川忠雄（1978年～1988年、1990年～1993年）、鳥居泰彦（1994年～2001年）、安西祐一郎（2002年～2009年）、清家篤（2010年～2015年）である。慶應義塾大学が刊行している『三田評論』、『塾報』、『塾』を利用しテキストデータ化した。これをKH Coder（http://khc.sourceforge.net/）を用いて計量テキスト分析した。

　分析の際に、橋本（2015）がわが国の高等教育の拡大・発展の段階と合わせる形で戦後70年台を4つの区分に分割したことに合わせ、第一期を高橋誠一郎、潮田江次、第二期を奥井復太郎、高村象平、永沢邦男、佐藤朔、久野洋、第三期を石川忠雄、第四期を鳥居泰彦、安西祐一郎、清家篤とした。その上で第一期はデータの欠落が著しいため、第二期以降のみを分析し東京大学の分析と比較[[24]](#footnote-24)した。

## 式辞内容の概観

　まず入学式において塾長がどういったことを述べてきたのか使用回数の多く特徴的な語を中心に概観する。

　図1は塾長が入学式で使用した全単語のうち、「名詞形」の単語を抽出し（60回以上使用された53語の名詞形単語）、そのネットワークをプロットした共起ネットワーク図（描画数60、サブグラフ検出modernity）である。

まず「諸君」「慶應義塾」を中心としたネットワークでは「歴史」や「日本」「世界」等の大学外における背景を表すものが特徴的に現われている。また、「慶應義塾」から「気風」「心」「精神」へと慶應義塾大学の気風への言及なども強く現われている。

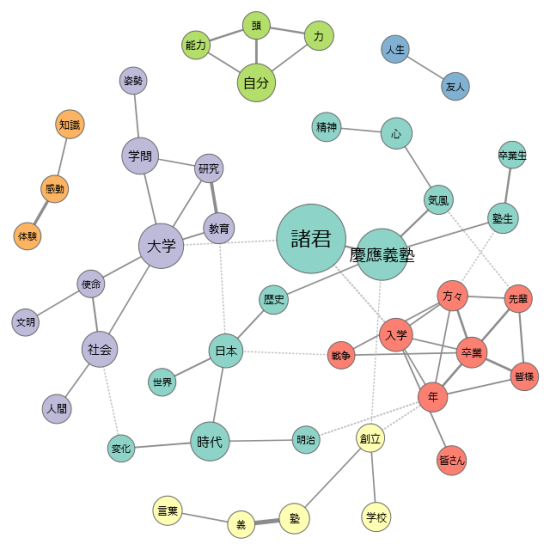
　また「大学」を中心としたネットワークでは「社会」における「使命」について「人間」や「文明」、時代の「変化」をキーワードによく述べられ、その中で「研究」「教育」「学問」について述べられている。また1994年度から卒業50年となる卒業生（以後塾員）を入学式に招き式辞にて触れることから、塾員に関するキーワードが「卒業」「戦争」「先輩」等として現われている。

図 1共起ネットワーク

図 2　共起ネットワーク

　その他にも「人生」「友人」といった大学生活を表すキーワードや「能力」「頭」「自分」など、石川忠雄が「自分の頭でものを考える能力」と述べたような大学で身につけて欲しい能力についてのキーワード、「体験」「感動」「知識」のような学問外の様々な活動を推奨する内容など、大学生活における多岐にわたる内容について触れられた式辞であることがわかる。

## 時代による推移と変容

　前節では約50年の概観を行ったが、これらの単語が時代ごとにどのように使われてきたのかを見ていきたい。先述の各時期と多用された名詞形単語を対応分析し、時代区分においてどういった単語がより多用され特徴的な単語としてあげられるのかを明らかにした。

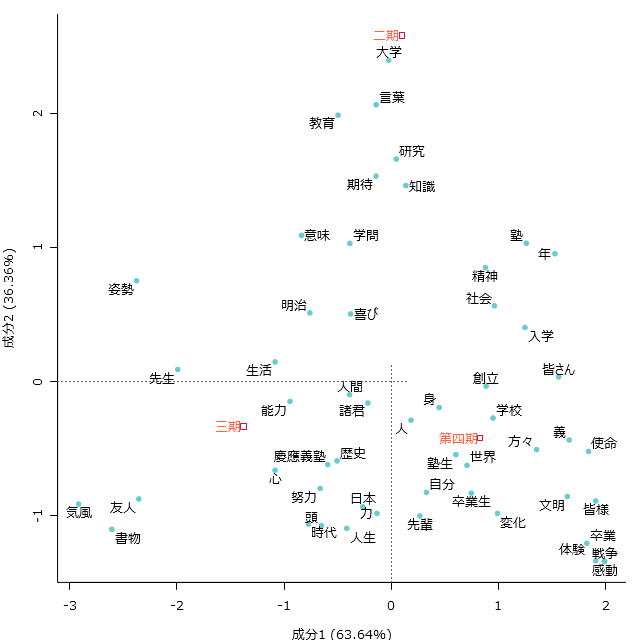
　まず寄与率の高い成分１[[25]](#footnote-25)を見てみると、第三期と第四期の間に隔たりがあり、第二期がその中間に位置する。第三期に特徴的な言葉として「友人」「書物」「先生」や「気風」「姿勢」「心」などのような大学生活の身近なものと学生の内面を表す言葉が多く現われていることに対して、第四期では「社会」「使命」「世界」「変化」などの大学外の情勢に関する語が多く位置している。第二期から第三期にかけては大学内に関する内容に大きく偏った反面、第三期から第四期にかけてはまた社会情勢に関する話題に大きく揺れ戻しがなされていることがわかる。

図 3　対応分析

　次に、寄与率が二番目に高い成分2を見たい。こちらは第三期と第四期に対して第二期が大きく乖離していることがわかる。第二期の特徴は「教育」「研究」「学問」「知識」等のフンボルトの影響が強い従来の大学教育論に根差した単語が多い点であり、第三期や第四期ではそうした考え方が薄れ、大学内の人間関係や塾員との関係、社会情勢や慶應義塾に関する内容へと以降している点が対照的である。

## 「慶應義塾大学」の自己認識

　これまでに塾長式辞の概観及び時代変遷を見てきたことを踏まえ、歴代塾長が自らの大学をどのように理解し、新入生に伝えようとしたのかを分析していきたい。

　本節では全文章の中から「慶應義塾大学」とその同義語（「慶應義塾」「慶応義塾」「慶応義塾大学」）のうちいずれかが含まれる一文（句点で終わる）を抽出し、その文のうちどの言葉が「慶應義塾大学」等とより強く関連しているかを分析することで、慶應義塾大学の自己認識を探ることとする。そのため時代区分ごとに「慶應義塾大学」等と一文の中で共起する関連語を検索し、Jaccardの類似性測度の順に上位25語までの名詞形単語を並べた。その中でも特にJaccardが0.05以上のものに関しては網掛けを行った。

なお、式辞の特性上関連語として挙がりやすい「入学」「塾生」「皆さん」「諸君」「皆様」「方々」の語は省略している。

　まず最初に各時期に共通する単語について見ていきたい。どの時期にも含まれているものとして「塾生」がある。慶應義塾大学独自である学生の呼称を入学生に向けて発信するため、「新入生諸君，諸君は今日から私ども慶応義塾の塾生となられたのであります。」（1,968年永沢邦男）と時代を問わずに塾生と慶応義塾との関係性を強く認識している。他には「教育」と「研究」が多い。第二期には「教育」が、第三期、第四期には「研究」と「教育」がそれぞれ上位にきている。これは慶應義塾大学が時代に関わらず「教育」と「研究」を大学の本分として意識していること、それを新入生にも理解した上で大学生活に取り組んで欲しいと考えていることがわかる。第二期には「研究」が入っていないが、これは分析手法上「慶應義塾大学」等の単語が含まれる一文を元に分析を行っているため、そこに含まれないような「研究」の使用の仕方が多かった場合、Jaccardが高くならないからである。しかし、前節の対応分析では第二期での「研究」の使用が他の期より特徴的な語として現われていたことから、本節においても第二期で「研究」を各時期に共通する単語として含めることにした。

　次に共通するのが「伝統」および「一員」「一家」「先輩」等の、歴史と人脈を意識した言葉である。「伝統」は第二期と第四期でJaccardが0.05以上として含まれており、第三期では「先輩」のような今まで卒業してきた塾員を意識した話しをしている。この塾員に触れて行くことで、次のように伝統を印象づけていることから「先輩」が「伝統」と共通のものとしてあげられることが分かる。

「（筆者注：福澤諭吉）先生のこの理想と心を土台にして、我々の先輩が一三〇年の長きにわたって築き上げてくれた慶應義塾独特の気風というものがあります。」（1,988年石川忠雄）

　これ以外にも慶應義塾大学では第二期において特に「一員」「一家」のような慶應義塾大学の長い伝統を背景にした新たな構成員としての自覚を新入生に持たせる単語を多く用いていた。

　次に、各時期の違いについて見ていきたい。他の時期と比べて最も大きく異なる時期は第三期である。第三期のみ、「国公立」「国」「私学」等の、国公立と私立とを対比させる内容を特徴づける語が上位にきている。実際、第三期では慶應義塾大学の気風やそこで学ぶ意味を説明するために、次のように述べられていた。

「その考え方に立って、我々の先輩は、百二十五年の長きにわたって営々と努力し、慶應義塾独特の、気風の中で諸君が人間形成をする、ここが、国公立の大学と、慶應義塾大学との最も大きな違いであります。」（1,983年石川忠雄）　こうした慶應義塾大学で学ぶ意味を説明する際に創設者である福澤諭吉を引用することは全ての期を通して行われていることであるが、「国公立」との対比を用いたものは第三期にのみ見れるものであった。そのためこの時期に国公立との差別化を行う背景があったこと、第四期にかけては逆に差別化する必要性がなくなったことなどの時代背景があると考えられる。

図 4　Jaccard類似性測度による関連語測定

## 「東京大学」と「慶應義塾大学」の比較

　慶應義塾大学の計量テキスト分析を元に、本節では橋本（2015）による東京大学の試論との比較を行っていきたい。

　まずは共起ネットワークを元に概観を比較していく。共通点としては以下のものが挙げられる。

１．研究、教育、学問の場として大学を認識していること

２．「社会」「精神」等の大学の伝統的な理念へ言及していること

３．「自分の頭でものを考える力」のような大学生の自律性を促す内容があること

　他方、相違点としては以下の点が挙げられる。

１．「先輩」や「友人」等の人間関係への言及が慶應義塾大学にのみみられること

２．「専門」「領域」「技術」等の学問を通した専門性への言及が慶應義塾大学ではみられないこと

　こうした比較を元に、両大学とも従来の大学教育感を前提とした上で専門性をアピールするか人間関係と独自の文化をアピールするかで異なる自己認識をしていることが言える。

　次に対応分析を元に時代変遷に関する比較を行いたい。東京大学は第二期から第四期にかけて社会情勢の影響を受けて段階的に変化してきたことが分かる一方、慶應義塾大学は第三期が前後に比べて大きく異なっていることがわかる。慶應義塾大学は「書物」「友人」「先生」などの社会情勢への言及と対照的に大学生活内部への言及がより強く行われるようになっている。しかし、第四期になると「社会」「世界」「使命」などの社会情勢を配慮した言及が急激に増え、東京大学と内容が親しくなる。このことから、第二期から第三期にかけて、そして第三期から第四期にかけて慶應義塾大学は東京大学と異なる影響を受けて自己認識をしていたことが考察できる。こうした点を元に、最後に両大学の自己認識を比較していきたい。

　第三節で見た通り、慶應義塾大学は東京大学同様に「伝統」を一貫してアイデンティティとして掲げており、従来の大学教育を踏まえて学生に対して研究と教育に力を入れて欲しいと考えている点で同様の自己認識をしていた。しかし慶應義塾大学の自己認識において大きく変化があったのは第三期に現われていた国公立大学と私立大学の対比である。

　東京大学は第二期から第四期にかけて従来の教養教育だけでない、「専門」や「能力」にみられる職業人としての専門性や、「外国」や「海外」にみられる世界の中での東京大学へとシフトが行われている点に対し、慶應義塾大学は第三期に創設者の思想と気風を強く打ち出し専門性と海外進出について触れなかった点、それが第四期になると卒業後の実業への言及や海外に関する言及が増える点で対照的である。

　この第三期の時代背景は大学紛争が終わり、そのかわり天野（1998）の言う「勉強に不熱心な学生」が増え始めたこと、また「受験戦争」による世論の批判が高まっていたこと、1984年に設置された臨時教育審議会を代表とする大学改革の流れが打ち出され始めたことが挙げられる。こうした時代背景を元に旧態依然とした学問と教養の伝授としての大学教育は批判され、その反面大学の社会的意義が強く求められるようになった。そうしたことから東京大学が着々と専門性を打ち出し、学生、産業界、政府へのアピールポイントとして打ち出していくことは当然である。これに対して慶應義塾大学は国公立大学と私立大学の違いによる東京大学との予算・人材の差から専門性を打ち出すことができないことも明らかである。平成27年度においても東京大学学部卒業生の半数が大学院進学を行うのに対し、慶應義塾大学は約16%に過ぎない。そのため慶應義塾大学の気風や福澤諭吉の思想に見える財界への進出、及び財界での人脈を国公立大学と異なるアピールポイントとして打ち出す必要があったと言えるだろう。そのため塾長式辞においてはより新入生に気風を身につけることと学生生活を通して人との関わりを意識すること、そして自身も塾員として社会に出ていくことを意識的に発信していたと考えられる。

　では第三期から第四期に関してはどういった社会的背景があっただろうか。慶應義塾大学の第四期は1994年からである。当時は1993年から18歳人口が減少し始めたこと、1991年に大学設置基準が改訂された事で多くの大学が一般教育の課程や教養部を廃止し学部教育の再編成に乗り出したことが特徴的である。こうした教育の空洞化への恐れからの私立大学間の競争激化や、大学の規制緩和が行われたことは慶應義塾大学に大きな影響を与えたと言って良い。事実慶應義塾大学は1990年に総合政策学部と環境情報学部の新設を行う象徴的な改革を行っていた。1990代には日本経営者団体連盟や経済同友会等の産業界を代表する団体が次々に大学の改革を求める提言や報告書を発表するようになったことから財界の大学改革意識が強まったことも背景として考えられる。

　そのため第四期には国公立大学と私立大学との対比だけではなく、他の私立大学との差別化。そして財界や社会への大学教育の存在意義をアピールする必要に迫られてきたのだ。

　現在でも慶應義塾大学は東京大学と同様に文部科学省の推奨するスーパーグローバル大学創成支援のトップ型に選ばれており、そういった採択を受けて実際に式辞において、「慶應義塾大学は、政府のスーパーグローバル大学創成支援事業から、世界トップレベルの教育、研究を行う日本の13の大学のひとつに選ばれています」（2015清家篤）と述べている。こうした理由により慶應義塾大学の自己認識は東京大学と足並みをそろえる形で大きく変化してきたと考えられる。

# おわりに

## 結論

　本研究により明らかになったことは二点ある。一点目は現在の大学の自己認識が社会情勢の影響を大きく受け全体として同質的である点である。勿論各大学により専門性を推す有無や伝統を重んじる有無等際はあるものの、多様性と呼べるものは教育理念においては感じられない。しかし、当然こうした状態に対して現段階で是非が問われるわけではない。

　二点目は、私立の雄たる慶應義塾大学が第三期から第四期までに大きく自己認識の舵を切り国公立大学である東京大学と足並みを揃えている事実である。そしてその象徴的な出来事としてスーパーグローバル大学創成支援事業に採択されたことを式辞で述べた点である。こうした政府の事業を式辞で述べたことは過去の式辞から見ると異例であり、特筆すべきである。またこうした政府の政策・事業に対する式辞での言及は他の大学においても目にすることができる。例えば、杏林大学は4つの文部科学省による補助事業を獲得したことを式辞で述べており、日本福祉大学も文部科学省が助成する「地（知）の拠点整備事業」に採択されたことなどを挙げている。こうした政府及び文部科学省の方針と政策の浸透により現在の大学の自己認識が醸成されていると考えられ、大学の自己認識が社会情勢、特に政府の事業や方針に大きく影響を受けているであろうことがわかった。

## 課題

　今後の課題としては他の大学や政府機関、メディアの言説の時代変遷を分析することが挙げられる。本研究では現在の大学総長式辞の概観及び、特定の大学の時代推移による変化と比較による考察に留まっていることから、大学の自己認識の実体が明らかになっていない。そのため新たな分析が求められる。

　また、本研究を通してテキストデータの入手限界があることも明らかになった。現在東京大学のように式辞を全集として出版している大学は、拓殖大学や弘前大学等ごく一部に限り、また、出版していない大学では慶應義塾大学の様に大学に問い合わせても保存されているものが限られていた。こうした過去のデータの欠落は高等教育政策を行う上で必要である大学の全体像把握において大きな限界を生むものであるため、今後の研究の障害なることが考えられるだろう。

本研究を進めるにあたり、ご指導を頂いた小熊英二教授に感謝致します。また、ゼミナールでの議論を通じて多くの知識や示唆を頂いた近代社会研究室の皆様に感謝します。

引用文献

天野郁夫　１９８６　「国立大学の構造」『旧制専門学校論』玉川大学出版部1993

天野郁夫１９９８「日本の大学改革」（http://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/bitstream/2115/29817/1/3\_P58-64.pdf）北海道大学

吉田文　２００１　「国立大学を分類する―地域交流の視点から―」『IDE』

吉田文　２００２　「国立大学の諸類型」『国立大学の構造分化と地域交流』国立学校財務センター

吉田文　「国立大学の諸類型」（http://www.zam.go.jp/n00/pdf/nc006011.pdf）独立行政法人　国立大学財務・経営センター

小林雅之　「大学の類型化と構造変動の分析～国立大学を中心に」（http://www.zam.go.jp/n00/pdf/nc002002.pdf）独立行政法人　国立大学財務・経営センター

島一則　「法人化後の国立大学の類型化―基本財務指標に基づく吉田類型の再考―」（http://www.zam.go.jp/n00/pdf/nf003004.pdf）独立行政法人　国立大学財務・経営センター

岡田典子「私立大学の建学の精神の類型―私立女子大学の位置づけ―」（http://ci.nii.ac.jp/els/110004557672.pdf?id=ART0007297940&type=pdf&lang=en&host=cinii&order\_no=&ppv\_type=0&lang\_sw=&no=1464243650&cp=）広島大学大学院教育学研究科

村瀬泰信「私立大学の組織分析に向けた機関類型化の試み」（http://archives.bukkyo-u.ac.jp/rp-contents/DK/0037/DK00370L037.pdf）獨協大学大学院紀要

大学審議会「21世紀の大学像と今後の改革方策について　―競争的環境の中で個性が輝く大学― 答申」　平成10年10月26日

橋本鉱市「大学の自己認識に関する一試論―東大総長の入学式・卒業式辞内容の計量テキスト分析から―」教育学研究科紀要

文部省「新制国立大学実施要綱」1948年

文部科学省「学制百年史」1972年

文部科学省「スーパーグローバル大学創成支援」（http://www.mext.go.jp/a\_menu/koutou/kaikaku/sekaitenkai/1360288.htm）

平成27年度北海道大学入学式　総長告辞（<https://www.hokudai.ac.jp/introduction/president/message/27-2.html>）

北海道大学アドミッション・ポリシー（<https://www.hokudai.ac.jp/admission/admission-p2013.pdf>）

平成27年度東北大学入学式　総長祝辞（<http://www.tohoku.ac.jp/japanese/profile/president/01/president0102/20150403.html>）

東北大学アドミッション・ポリシー（http://www.tnc.tohoku.ac.jp/admission\_policy.php）

平成27年度東京大学入学式総長式辞（<http://www.u-tokyo.ac.jp/gen01/b_message27_01_j.html>）

東京大学アドミッション・ポリシー（<http://www.u-tokyo.ac.jp/stu03/e01_01_17_j.html>）

平成27年度名古屋大学入学式　総長祝辞　（<http://www.nagoya-u.ac.jp/about-nu/president/statement/20150406b.html>）

名古屋大学アドミッション・ポリシー（<http://www.nagoya-u.ac.jp/2012website/admission/pdf/admission-policy.pdf>）

平成27年度京都大学入学式　総長式辞（<http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/about/president/speech/2015/150407_1.html>）

京都大学アドミッション・ポリシー（<http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/education-campus/policy/ad_policy/policy.html>）

平成27年度大阪大学入学式　総長式辞（<file:///C:/Users/PEKOE/Downloads/sikiji_2704.pdf>）

平成27年度九州大学入学式　総長告辞（<http://www.kyushu-u.ac.jp/university/president-room/message/1504nyugaku.php>）

九州大学教育憲章（<http://www.kyushu-u.ac.jp/entrance/examination/H28ippanyoukou.pdf>）

平成２８年度札幌市立大学入学式　総長式辞（<http://www.scu.ac.jp/about/outline/president/#president_m02>）

平成２２年度上智大学入学式　総長式辞（<http://www.sophia.ac.jp/jpn/aboutsophia/sophia_spirit/president_mess/president_column/2010nyugaku_gakutyomess>）

上智大学アドミッション・ポリシー（<http://www.sophia.ac.jp/jpn/program/UG_policy/admission_policy_UG>）

青山学院大学学長あいさつ（<http://www.aoyama.ac.jp/outline/ideal/greet.html>）

青山学院大学アドミッションポリシー（大学）（http://www.aoyama.ac.jp/outline/information/education/general\_admission.html）

平成２８年度早稲田大学総長入学式　式辞（<http://www.waseda.jp/top/assets/uploads/2016/04/ec724713d698c371d02a69d3275ce8b11.pdf>）

早稲田を支えるPolicy（<http://www.waseda.jp/keiei/vision150/about/policy.html>）

中央大学受験要項一般・統一（<https://e.syutsugan.jp/OP1073/pdf/%E4%B8%AD%E5%A4%A716_%E4%B8%80%E8%88%AC%E7%B5%B1%E4%B8%80%E8%A6%81%E9%A0%85_01.pdf>）

平成28年度法政大学総長入学式　式辞（<https://www.hosei.ac.jp/gaiyo/socho/message/160403.html>）

法政大学　大学の教育目標（<http://www.hosei.ac.jp/gaiyo/rinen/hoshin/mokuhyo/>）

法政大学　教育目標・各種方針（<http://www.hosei.ac.jp/gaiyo/rinen/hoshin/index.html>）

平成28年度明治大学総長入学式式辞（<https://www.meiji.ac.jp/gakucho/speech/2016entrance.html>）

明治大学アドミッションポリシー（<https://www.meiji.ac.jp/ims/outline/policy_03.html>）

平成28年度立教大学総長入学式式辞（<http://www.rikkyo.ac.jp/aboutus/philosophy/president/entrance2016/>）

立教大学入学者受入れの方針（<https://www.rikkyo.ac.jp/aboutus/philosophy/programs/admission_policy/bachelor/>）

平成28年度亜細亜大学総長入学式式辞（<http://www.asia-u.ac.jp/about/president/article_speech/speech04/>）

平成28年度杏林大学総長入学式式辞（http://www.kyorin-u.ac.jp/cn/html/kyorin/00003/201604131/index.html）

平成28年度関東学院大学総長入学式式辞（<http://univ.kanto-gakuin.ac.jp/index.php/ja/home/news/news/408-2016.html>）

平成28年度久留米大学総長入学式式辞（<https://www.kurume-u.ac.jp/site/backno/20160406-02.html>）

平成28年度札幌大学総長入学式式辞（<https://www.sapporo-u.ac.jp/univ_guide/outline/president/message_h28en.html>）

平成28年度淑徳大学総長入学式式辞（<http://www.shukutoku.ac.jp/university/shukutoku/president/message01.html#211>）

平成28年度大阪経済法科大学総長入学式式辞（<http://www.keiho-u.ac.jp/mt/president/2016/04/post-22.html>）

平成28年度大東文化大学総長入学式式辞（<http://www.daito.ac.jp/president_blog/details_20080.html>）

平成28年度桃山学院大学総長入学式式辞（<https://www.andrew.ac.jp/newstopics3/2016/hl026a0000003ry5.html>）

慶應義塾大学「塾」1963.4-

慶應義塾大学「三田評論/慶應義塾大学編」1946-

慶應義塾大学「三田評論総目次」1980

東京大学「東京大学歴代総長式辞告辞集」1997

KHcoderチュートリアル（<http://www.slideshare.net/khcoder/kh-coder-28776074>）

統計的テキスト解析(12)～テキストの特徴分析～（https://www1.doshisha.ac.jp/~mjin/R/67/67.html）

Rと対応分析（https://www1.doshisha.ac.jp/~mjin/R/26/26.html）

慶應義塾大学就職・進路データ（<https://www.andrew.ac.jp/newstopics3/2016/hl026a0000003ry5.html>）

東京大学学部卒業者の卒業後の状況（http://www.u-tokyo.ac.jp/stu04/e09\_01\_j.html）

1. 文部省「新制国立大学実施要綱」1948年 [↑](#footnote-ref-1)
2. 文部科学省「学制百年史」1972年 [↑](#footnote-ref-2)
3. 九州大学教育憲章 [↑](#footnote-ref-3)
4. 平成２７年度大阪大学入学式総長式辞 [↑](#footnote-ref-4)
5. 平成２７年度名古屋大学入学式総長告辞 [↑](#footnote-ref-5)
6. 東北大学アドミッション・ポリシー [↑](#footnote-ref-6)
7. 平成２７年度東京大学入学式総長式辞 [↑](#footnote-ref-7)
8. 平成26年度北海道大学入学式総長告辞 [↑](#footnote-ref-8)
9. 東京大学アドミッション・ポリシー [↑](#footnote-ref-9)
10. 平成２７年度東京大学入学式総長式辞 [↑](#footnote-ref-10)
11. 平成２７年度名古屋大学入学式総長祝辞 [↑](#footnote-ref-11)
12. 平成２７年度東京大学入学式総長式辞 [↑](#footnote-ref-12)
13. 平成26年度東北大学入学式総長式辞 [↑](#footnote-ref-13)
14. 北海道大学の教育研究理念である「フロンティア精神」「国際性の涵養」「全人教育」「実学の重視」のこと [↑](#footnote-ref-14)
15. 平成26年度北海道大学入学式総長告辞 [↑](#footnote-ref-15)
16. 立教大学入学者受入れの方針（学士課程教育） [↑](#footnote-ref-16)
17. Waseda Vision150「早稲田を支えるPolicy」 [↑](#footnote-ref-17)
18. 平成28年度亜細亜大学入学式式辞 [↑](#footnote-ref-18)
19. 脚注18に同じ [↑](#footnote-ref-19)
20. 平成28年度札幌市立大学入学式式辞 [↑](#footnote-ref-20)
21. こうした表現は旧帝国大学やマンモス私立大学でも多用されている。 [↑](#footnote-ref-21)
22. 教授代表として登壇 [↑](#footnote-ref-22)
23. 療養中の高村象平に代わり登壇 [↑](#footnote-ref-23)
24. 計量分析のためテキスト量に合わせ分析基準を調整している。例えば第一節の分析では名詞形単語の抽出下限が東京大学において90回であるのに対し、慶應義塾大学は60回としている。 [↑](#footnote-ref-24)
25. 図２の軸の設定は、成分１に最も相関が大きくなる方向の軸、成分2に次点の軸を設定した数理的処理である。 [↑](#footnote-ref-25)